

花影に夜すから鳴きし鈴虫の涙なるらむ萩の下露

思ふことただ ^{いたづら} 徒に砂にかきて波にまかせぬ千鳥なく夕

長持の蓋の上にてもの読めば倉の窓より秋風ぞふく

去年の春蝶を埋めし桃の根に ^{すみれ} 堇もえいでて花さきにけり

あたらしくひらきましたる歌の道に君が名よびて死なんとぞ思ふ

母君のうつし糸抱きて ^{よべ} 昨夜もねぬたの ^{ふるさと} しきものよ故郷の夢

それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘れ草つむ

虹もまた消えゆくものか我ためにこの地この空恋は残るに